

はじめに

文は人なり、という言葉があります。18世紀のフランスの博物学者・啓蒙思想家のビュフォンが講演の中で述べた有名な一節で、文を読めば書き手の人となりや生き方が分かるという意味です。

ここで言う「文」ですが、単なる文章ということではなく、styleという言葉が使われています。一義的には文体を指していますし、もっと広く解釈すれば、生き方という意味になります。つまり、文は生き方そのものであり、文の中から、書き手の姿が立ち現れてくるのです。

大学で学ぶことを決意した皆さんは、学ぶという行程を通じて、独自のスタイル（文体）を手に入れ、ひいては、それぞれの人生の歩き方を身につけるための道に踏みだしたといえるでしょう。学んだことを語り、表現する文体は自らが主体的に追求し、努力して獲得していかなければなりません。

ところが、今まで当然視されていたこうした学びの在り方は、生成AIの登場によって大きな挑戦にさらされています。プロンプトを入力すれば、AIが瞬時に文章を出力してくれるわけですから、その普及は急速です。ワープロの登場以降、漢字を書けない日本人が随分と増えてきましたが、生成AIばかりを使うことによって、言語を豊かに操るといって、人間に進化をもたらした能力は衰退し、やがて退化していくことでしょう。「文は人なり」という格言は空疎に響き、AIが作成した無機質な「文体なき情報」だけが氾濫する時代の到来が現実味を帯びています。

そうしたディストピアを望まず、人は自分の文体を持つべきだと信じる人は、やはり昔ながらの、いわば古典的な修練を続けるしかありません。「読む、書く、聞く、話す」力の向上に王道はなく、人としての努力を積み重ねることしか、高いリテラシーは得られないのです。

本書を執筆された藤好陽太郎教授は、30年間にわたって毎日新聞社の記者を務めていた人です。記者という職業は、読み、書き、聞く技能が問われます。ある問題に行き当たった記者は、これを社会に問わねばならないという意識の下、難解な内容の資料や文献を読み込み、複雑な人の話を聞いて再構築し、読者に伝わるように簡明な文体で記事にまとめるのです。相手の話を深く聞くために、質問の技術も備えていないといけません。書くことの難しさや怖さ、そして楽しさを知っている藤好先生の生きた知見は、大いに役立つこ

とでしょう。

藤好先生はまた、プレゼンテーションでの学生指導に実績を残されています。聴衆に対して分かりやすく、印象を残す自己表現の技術は今の社会において、かつてなく強く求められています。本書はこの分野でも大切な技法を提供していますから、よく吸収してほしいと思います。

初年次生の皆さんは、専門分野の学びに向けてテイクオフしなければなりません。自らの「学びのスタイル」を獲得する土台づくりに、本書を活用するよう切望します。

追手門学院大学教授 佐藤伸行

活躍できる社会人になれる教科書

はじめに	佐藤伸行氏	i
序 章 大学について		1
第 1 章 アイスブレイク		5
第 2 章 ノート・テイキングの基本		17
インタビュー 1 「どうすれば集中できるのか」	畠中雄平氏	26
第 3 章 リーディングの基本		29
第 4 章 リーディングの応用		37
第 5 章 情報収集の方法 —— 新聞の読み方など		47
第 6 章 事実とは何か —— ニュースの判断		59
インタビュー 2 「フェイクニュースの見分け方」	齋藤信宏氏	69
第 7 章 ライティングの道 1 文章のルール		73
第 8 章 ライティングの道 2 言葉選びと構成		83
第 9 章 実践ライティング 1 読書感想文（書評）		95
第 10 章 実践ライティング 2 レポート		103
第 11 章 ライティング補足 インタビュー・自分史		115
第 12 章 プレゼンテーションの基本		125
第 13 章 グループディスカッションの手順と方法		135
第 14 章 出口戦略を考える		145
インタビュー 3 「20 代の過ごし方」	富山和彦氏	154
【解答例一覧】		157
あとがき		161
参考・引用文献、web 情報		164